

『ブラザー・サン シスター・ムーン』

映画好きの私は、今も暇があれば、ビデオではあるが映画を見るようにしている。

かの有名な映画評論家である淀川長治氏が、ことあるごとに『映画は人生そのものである』と言われたように、私自身、映画を見て、そこから教えられることが多い。

過去、見た中で色々な作品が心に残っているが、中でもとりわけ胸打たれ、思い出す度に見る映画といえば、フランコ・ゼフィレリ監督のブラザー・サン シスター・ムーンである。高校時代にK神父から紹介されて見たこの映画は、実在した聖フランチェスコの青春時代を描いた物語である。



イタリアのアッシジで、金持ちの呉服商の家に生まれ、何不自由なく暮らす道楽息子のフランチェスコという若者が、名誉を求めて戦争に参加したが、熱病に倒れて帰ってくる。生死の境をさまよった事を契機に、それまで富や名誉などを追い求めていた自分の愚かさに気付き、それよりも大切なものがあることに気づく。鳥の声、空の青さ、花の美しさ、風のやさしさ。その一つ一つを

肌で感じ、その中から愛と安らぎを感じる。そして、家の財宝を捨て、服も脱ぎ去り、家も捨て、廃墟と化したサン・ダミアノ教会を一人で再建しようとする。やがて、無条件に人や自然を愛するその姿に、かつて共に遊び、戦争にも参加した友人たちが心打たれ、彼のもとに走り、一緒に教会を再建していく。

この映画を見る度に、いつも心が洗われる思いになる。見栄え、富、栄誉、肩書き、プライドよりも、素朴さ、自然、愛、優しさ、美しさ、の尊さを知る。

今まで、多くの末期がんの方と出会ってきた。それぞれの方の人生観、価値観、社会的立場はそれぞれに違う。しかし、どんな肩書きを持っていても、どんな立派な人生観を持っていても、皆、同じく病める一人の人となる。そのような中で、多くの方が、そばにある花の色や香り、水や風の音、朝の光、など、今までありきたりであった一つ一つのものに安らぎを感じる、と言い、それらを求める。ひょっとしたら、今までの生きてきた自分の歩みや人生観は何の意味も持たないと感じたり、根底から覆っているのかもしれない。実際にそう口にされる方もいる。死を前にして、確かにその人の価値観が変わっているのでは、と思わせることが多い。

私は、そのような方と出会う度に、自分が今生きているうえで、大切なものとはいったい何なのだろう？と自問自答する。もちろん答えは出ないのだが、少なくとも自然の美しさと尊さをいつも感じていたいし、それを感じることができることに感謝していたいと思う。そして、自分の富、栄誉だけのために生きていたくない、とも思う。

この映画は、時々、自分の中で方向性を見失ったり、嫌な自分が見えてきたときに、そこから純粋な気持ちに引き戻してくれる。そして、『ホスピス

のこころを持つ医療』をめざす私の思いを後押ししてくれ、さらには自分の生き方と進むべき道の道標にもなってくれるのである。

最後に、映画に流れるドノバンの美しい歌の中から、1曲の訳詩を紹介する。

甘く優しく 鳥たちは歌う
枝葉を伸ばした 木の上で
風がやさしく ほおをなでる
何てすばらしい日

青い草原を ひとり歩く
チョウのように自由気ままに
花の美しさに 安らぎを覚える
何てすばらしい日

この安らぎを みんなにあげたい
こんな日には 人生も楽しい
この安らぎを 分かち合いたい
何てすばらしい日

